富山県新湊市

松木遺跡発掘調査報告

1997年3月

新湊市教育委員会

富山県新湊市

松木遺跡発掘調査報告

1997年3月

新湊市教育委員会

序

新湊市は、庄川水系の沖積平野である射水平野の最も低いところに位置し、背後に富山湾をひかえ、その水の利を活かして古くから日本海側の海運と漁業の拠点として栄えてきました。

このたび、個人住宅建築に先立ち発掘調査を行なった松木遺跡は弥生時代を主体とする遺跡です。 富山県に弥生文化が定着するのは弥生時代中期と考えられていますが、低湿地である射水平野に広がるのはやや遅い弥生時代後期と考えられます。今回の調査でその当時の様子の一端を確認することができました。

この冊子には不備な点も多々あるかと思いますが、新湊市として初めて発掘調査を行なったこの松木遺跡の貴重な資料が、文化財保護と地域の歴史を理解する上での一助になりましたら幸いです。

終わりになりましたがこの調査を行なうにあたり、地元の方々をはじめ多大なご協力とご理解をいただきました関係者の方々に深く感謝申し上げます。

平成９年３月

新湊市教育委員会

教育長　糸　岡　栄　吾

例　言

1　本書は富山県新湊市松木地内に所在する松木遺跡の発掘調査報告である。

2　調査は個人住宅建築に先立ち、新湊市教育委員会が実施した。調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターから調査担当者の派遣を受け指導と協力を得た。また調査費用は新湊市教育委員会が国庫補助金・県費補助金の交付を得た。

3　調査事務所は新湊市教育委員会社会教育課に置き、社会教育課長 大西 臣一が調査事務を総括した。また、調査にあたって稲見俊夫氏・(社) 新湊市シルバー人材センター・原建設㈱の協力を得た。

4　調査期間、調査面積は次のとおりである。

調査期間　平成８年１０月２０日（月）～平成８年１１月２２日（金）（実働２０日）

調査面積　２１５㎡

5　試掘調査・発掘調査担当者は次のとおりである。

試掘調査　平成７年１２月８日（金）

新湊市教育委員会　文化財保護主事　宗　融 子

本 調 査　新湊市教育委員会　文化財保護主事　宗　融 子

富山県埋蔵文化財センター　〃　越 前 慶 祐

6　資料の整理、本書の執筆・編集は富山県埋蔵文化財センター職員の指導・助言を得て、調査担当者が行った。

7　本書の作成・遺物整理にあたっては、下記の方々から種々のご指導をいただいた。記して謝意を表したい。

宮田進一・神保孝造・久々忠義・高梨清志・池田恵子（順不同・敬省略）

8　本書の土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著 1994『新版標準土色帖』に準拠している。

9　本書の挿図・写真図版の表示は次のとおりである。

(1)　方位は真北・水平基準は海抜高である。

(2)　遺構の表記は次の記号を用いた。溝：ＳＤ・小穴：ＳＰ

(3)　遺物実測中のスクリーントーンの貼り込みは次のとおり表現した。▒：赤彩

(4)　挿図の土器の縮尺は１／３に統一した。写真図版の遺物の縮尺は１／３・１／４に統一した。

10　出土品および記録資料は、新湊市教育委員会が保管している。

11　発掘調査・遺物整理参加者は次のとおりである。

今井 清・酒越繁雄・塩谷 清・作道喜代則・寺崎友治・魚津外夫・藤田みよ・塚原照子・高田厚子（現地作業員）

井上 都（整理作業員）

目　次

序 文

例 言

目 次

Ⅰ　序 章……1

1　遺跡の位置と環境……1

2　調査にいたる経緯……2

Ⅱ　調査の概要……3

1　調査の経過……3

2　遺　構……3

3　遺　物……7

4　まとめ……7

Ⅲ　周辺の遺跡について……8

1　遺跡の概観……8

2　遺跡の概要……9

写真図版

第１図　地形と周辺遺跡図

第２図　遺跡範囲及び試掘調査位置図

第３図　本調査区割図

第４図　調査区全体図

第５図　遺構断面図

第６図　遺物実測図

第７図　周辺の遺跡について　(1)

第８図　周辺の遺跡について　(2)

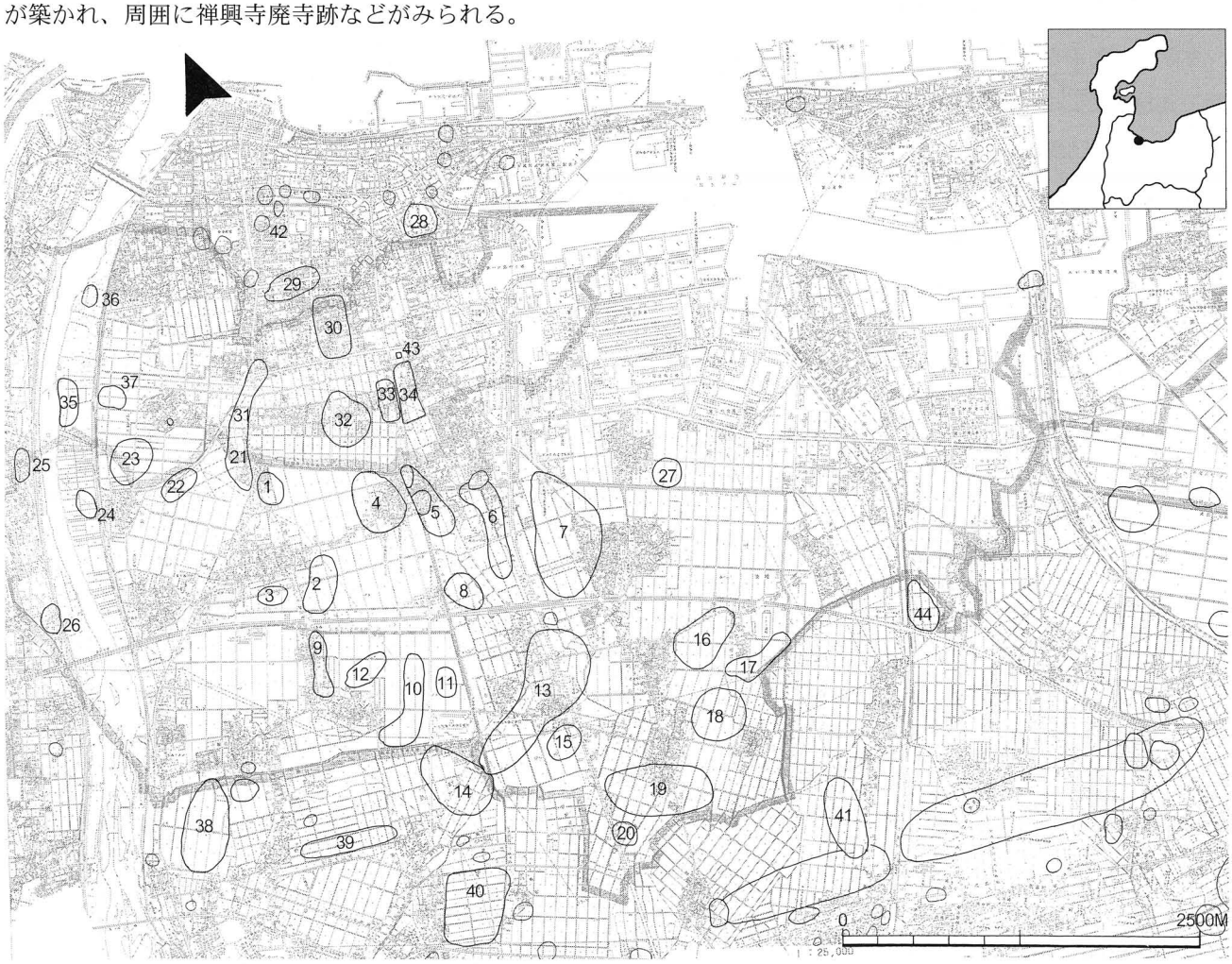
第９図　松木中鹿遺跡遺物実測図

Ⅰ　序　章

1　遺跡の位置と環境（第１図）

新湊市は、富山平野を南北に二分する呉羽山丘陵の西側に位置しており、富山湾へ注ぐ庄川の右岸に広がる沖積低地にその市域を形成する。市内の標高は高いところで約５m、低いところで約０mを測る。この沖積低地は射水平野と呼ばれ、その中央には現在富山新港となっている、かつての放生津潟があった。放生津潟は約６，０００年前（縄文時代前期）の縄文海進のころは、射水丘陵のあたりまでひろがっていたとされる。その後、気候の寒冷化に伴い、庄川・和田川・下条川・鍛治川・神楽川などの諸河川によって運ばれた砂や粘土が堆積し、次第に陸地化していった。諸河川の氾濫流路間には自然堤防洲が形成され、海岸線には標高約５mに達する砂丘が連なる。

松木遺跡は、標高約１．５mの微高地上に立地する弥生時代後期の集落遺跡である。周辺の弥生時代の遺跡としては、松木遺跡の東側に位置する高岡市中曽根遺跡が、弥生時代中期からの遺跡としてよく知られている。その他西側の松木七口遺跡や、木戸口Ａ遺跡なども弥生時代の遺跡であり、これらの遺跡はいずれも先述の自然堤防洲上に立地している。また縄文時代の遺跡としては高岡市上牧野新庄川遺跡や久々湊遺跡などがあるが、周辺における縄文時代の遺跡はごく僅かである。古代には、大島町北高木遺跡において奈良・平安時代の川から木簡や人形などが発見されており、同遺跡の北に連なる高木・荒畑遺跡も一連の遺跡と考えられている。中世には越中の守護所として放生津城が築かれ、周囲に禅興寺廃寺跡などがみられる。



第１図　地形と周辺遺跡図(1/50,000)　1 松木遺跡　2 松木中鹿遺跡　3 松木大ノ田遺跡　4 朴木Ｃ遺跡　5 朴木Ａ遺跡　6 高島Ａ遺跡　7 作道遺跡　8 鏡宮北遺跡　9 沖塚原遺跡　10 沖塚原東Ａ遺跡　11 沖塚原東Ｂ遺跡　12 沖塚原東Ｃ遺跡　13 高木・荒畑遺跡　14 北高木遺跡　15 南浦遺跡　16 津幡江西遺跡　17 津幡江遺跡　18 今井遺跡　19 今井南遺跡　20 今井二島遺跡　21 木戸口Ａ遺跡22 松木七口遺跡　23 上牧野・宮袋遺跡　24 宮袋Ｂ遺跡　25 古宮遺跡　26 川口地先遺跡　27 久々湊遺跡　28 放生津城跡　29 背戸狭間遺跡　30 中曽根北遺跡　31 中曽根西遺跡　32 中曽根遺跡　33 中曽根館遺跡　34 牧野金屋遺跡　35 上牧野新庄川遺跡　36 下牧野新庄川遺跡　37 上牧野田島氏畑遺跡　38 若杉遺跡　39 中野遺跡　40 小林遺跡　41 愛宕遺跡　42 禅興寺廃寺跡　43 僕館塚遺跡　44 稲積遺跡

2　調査にいたる経緯（第２図）

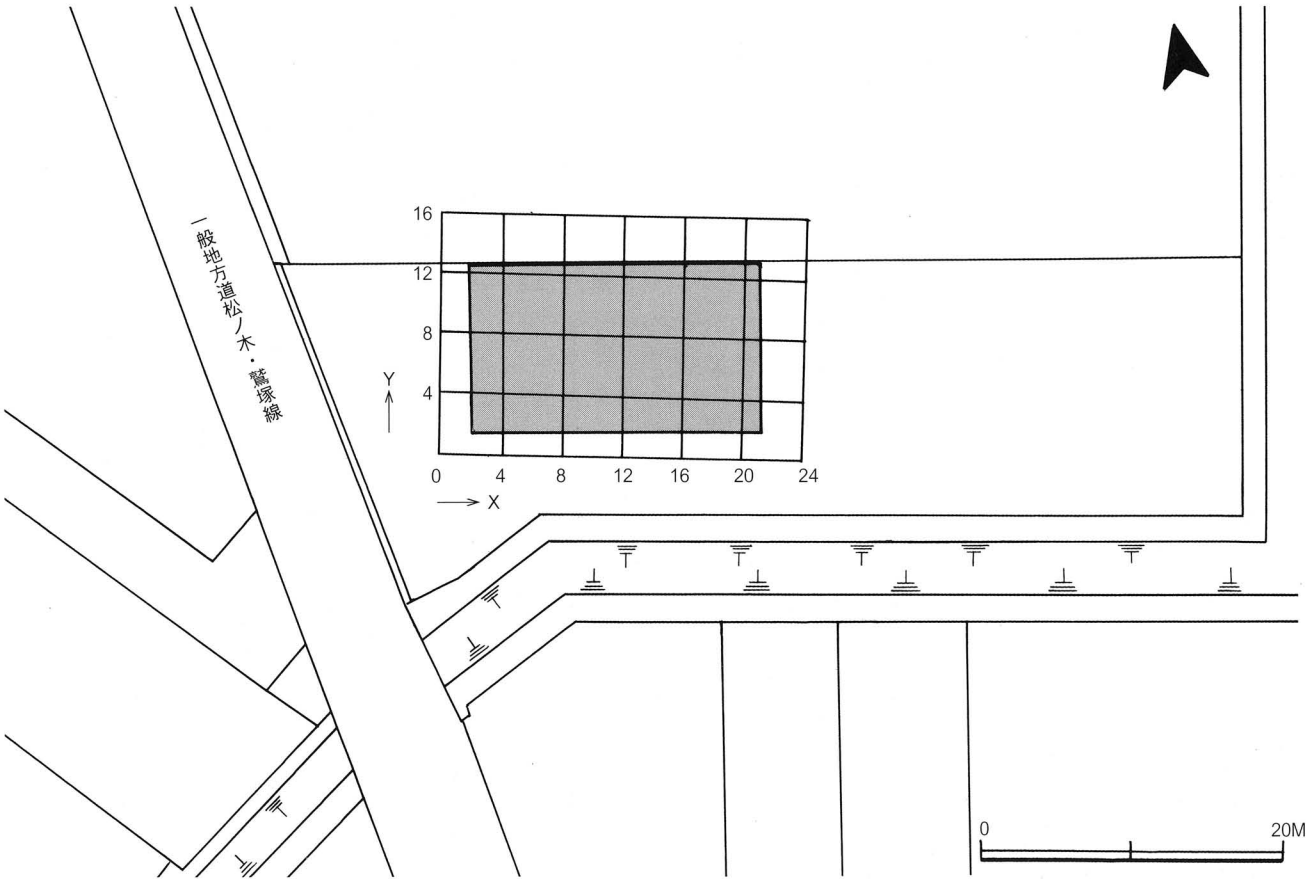
平成７年９月、個人住宅建設に伴い農振除外の申請が提出され、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である松木遺跡の範囲内であることから、新湊市教育委員会は事前調査が必要である旨を申請者に通知した。

これを受け、申請者との協議の結果、土地所有者の承諾を得て工事の事前に試掘調査を行なうこととなった。調査期日は平成７年１２月８日、調査対象面積は４９９㎡である。

調査では弥生土器が溝状遺構から出土し、遺跡の遺存を確認した。そのため、申請者と新湊市教育委員会の協議の結果、住宅建築部分である申請地東側２１５㎡について本調査を行なうことになった。

本調査は新湊市教育委員会が国庫補助金の交付を得て実施することとし、富山県埋蔵文化財センター職員の派遣を受け平成８年１０月に行なうこととなった。

第２図　遺跡範囲及び試掘調査位置図(1/50,000)



第３図　本調査区割図(1/500)

Ⅱ　調査の概要

1　調査の経過

(1)　調査の方法（第３図）

調査は試掘調査の結果をもとに住宅建築部分にあたる２１５㎡を調査対象として、バックホウによる表土除去を行った。次に１０ｍ×１０ｍの大グリッドを一区画とし、さらに２ｍ×２ｍのグリッドを最小単位として調査区を設けた。なお基準杭は畦畔に沿って任意に起点を設定し、座標軸は南北をＸ軸、東西をＹ軸とした。その後人力により遺構確認を行い、さらに個々の遺構掘削、図化作業を行なった。調査期間は平成８年１０月２０日から平成８年１１月２２日（実働日数２０日）までである。

(2)　地形と基本層序

遺跡は一般地方道松木・鷲塚線に沿って位置し、標高は約１．５ｍである。地山は標高約１．３ｍで、南西から北東にかけて緩やかに傾斜する。

基本層序はⅠ層：耕作土、Ⅱ層：オリーブ黒色粘質土、Ⅲ層：灰黄色粘質土、Ⅳ層：青灰色粘土、Ⅴ層：黒褐色粘質土、Ⅵ層：青灰色砂と堆積する。遺物包含層は削平されており、遺構はⅡ層直下からⅢ層の地山に掘り込まれる。Ⅴ層の黒褐色粘質土はピート質で、植物遺体が混じる無遺物層である。なお、Ⅳ層の青灰色粘土層で涌水点に達する。

2　遺　構（第４・５図）

調査によって検出した遺構は、溝４条、小穴などである。対象地は圃場整備による削平を受けており、包含層・遺構面の遺存状況はよくない状態である。

(1)　溝

４条の溝は南西から北東方向にほぼ平行して流れる。ＳＤ１～ＳＤ３からは破片ではあるが弥生土器が出土しており、当該期の遺構と考えられる。ＳＤ４は下層部から弥生土器が出土するものの、珠洲焼や越中瀬戸も出土するため、近世以降の溝と考えられる。ＳＤ４からは所属時期は不明であるが、加工してある棒状の木製品や板材、クルミや桃の種など植物遺体も多く出土する。

ＳＤ１　幅１００～２６０cm、深さ１０～４０cm。南西部分は非常に浅い。中央部に人為的に埋められた土坑状の落ち込みがみられるが、性格は不明である。土杭状落ち込みの断面形は、東側が比較的直線的に落ち込み、西側は緩やかに立ち上がる。

ＳＤ２　幅６０cm～２１０cm、深さ８～１２cm。北東に向かって２本に分かれて流れる。

ＳＤ３　幅７０cm～１１０cm、深さ５～１６cm。

ＳＤ４　幅３３０cm～３６０cm、深さ４０cm～５０cm。上層部はカクラン土が混入する。弥生土器とともに中世・近世の陶磁器が出土しており、近世以降の溝と考えられる。

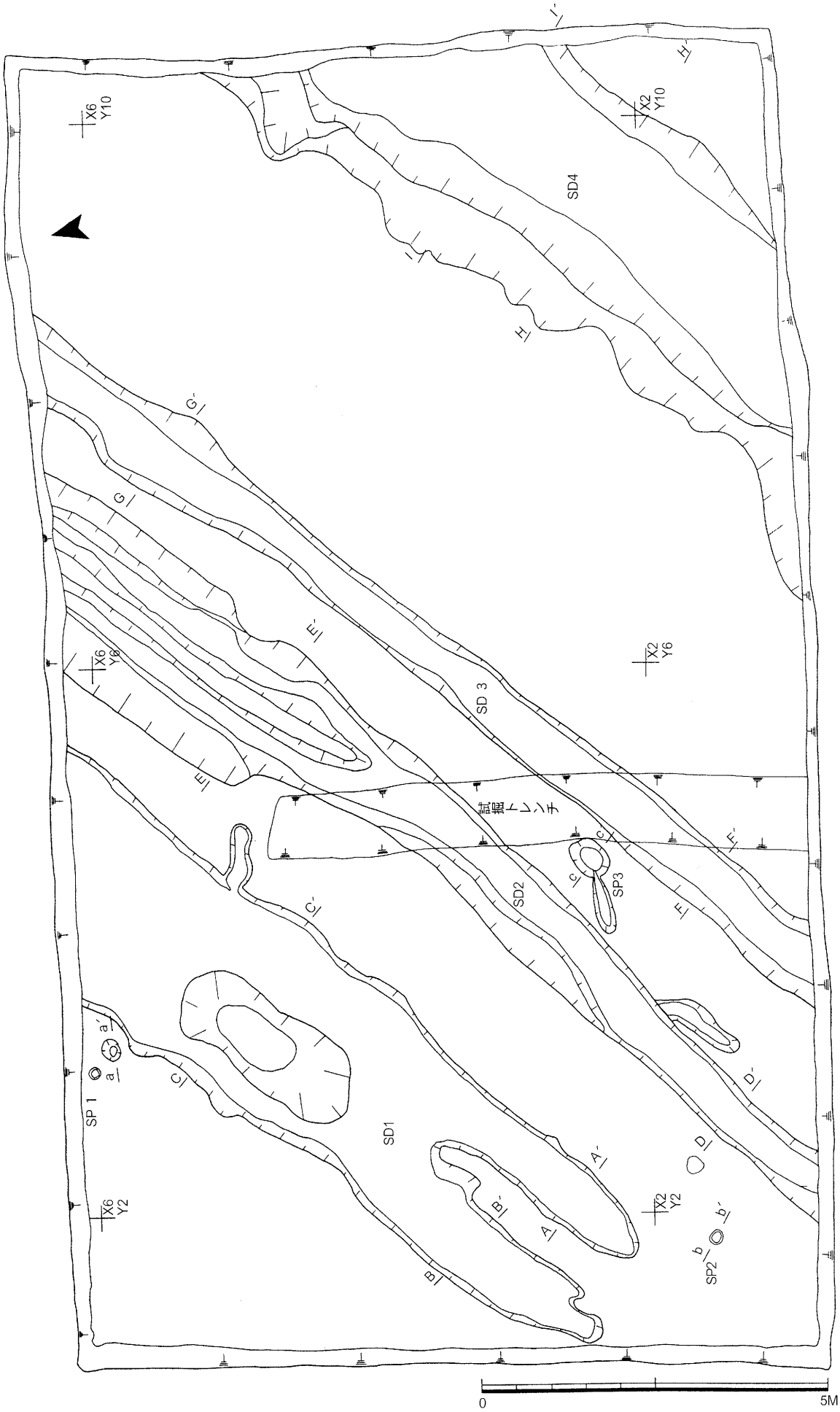
(2)　その他

調査区西側を中心に小穴数基が検出されたが、いずれも浅いものである。

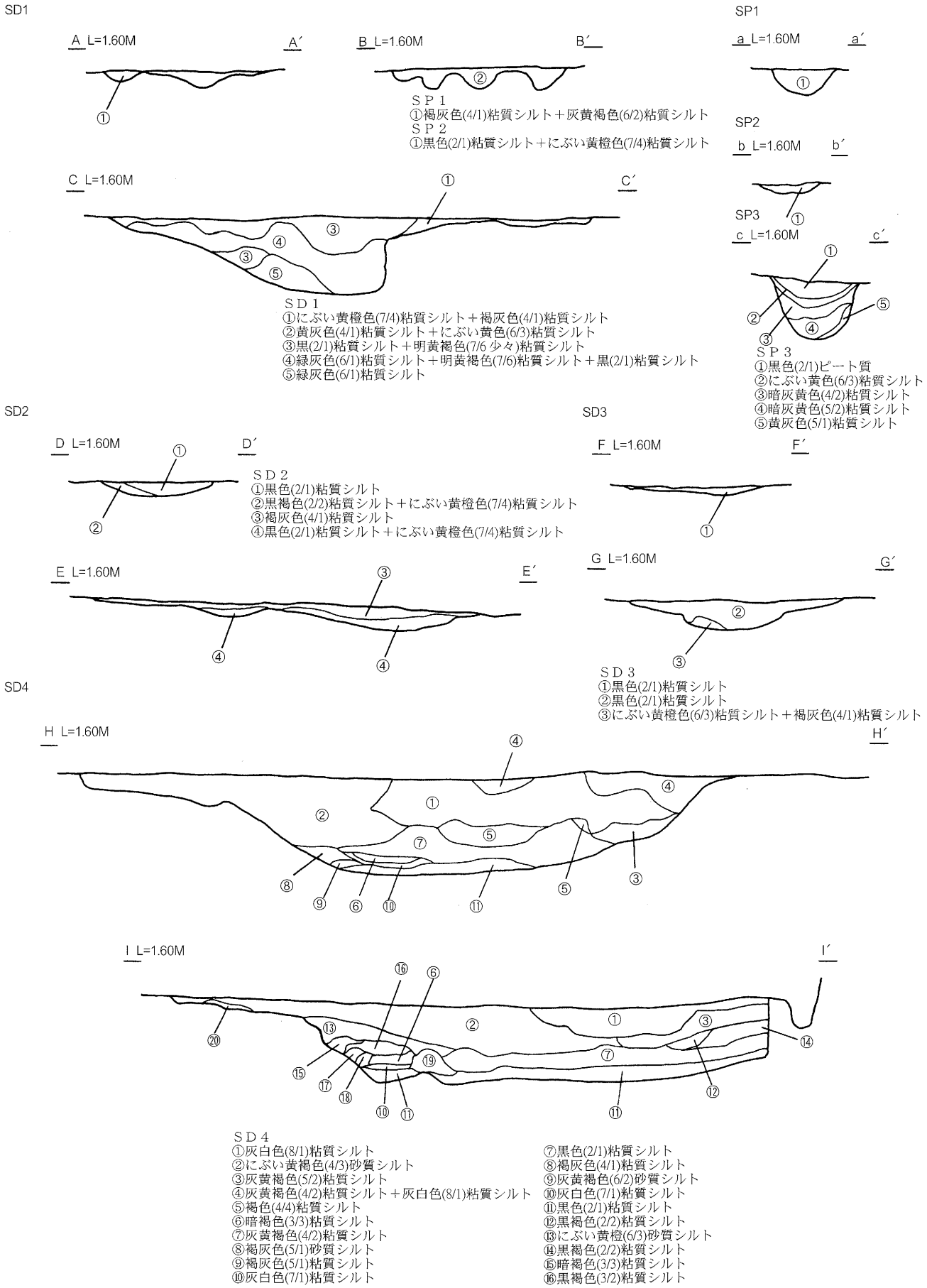
ＳＰ１　幅３０cm、深さ１２cm。弥生土器片が数点出土している。

ＳＰ２　幅３０cm、深さ６cm。

ＳＰ３　幅５０cm、深さ３２cm。埋土には炭化物が若干混じる。



第４図　調査区全体図(1/80)



ＳＰ１
①褐灰色(4/1)粘質シルト＋灰黄褐色(6/2)粘質シルト
ＳＰ２
①黒色(2/1)粘質シルト＋にぶい黄橙色(7/4)粘質シルト

ＳＤ１
①にぶい黄橙色(7/4)粘質シルト＋褐灰色(4/1)粘質シルト
②黄灰色(4/1)粘質シルト＋にぶい黄色(6/3)粘質シルト
③黒(2/1)粘質シルト＋明黄褐色(7/6少々)粘質シルト
④緑灰色(6/1)粘質シルト＋明黄褐色(7/6)粘質シルト＋黒(2/1)粘質シルト
⑤緑灰色(6/1)粘質シルト

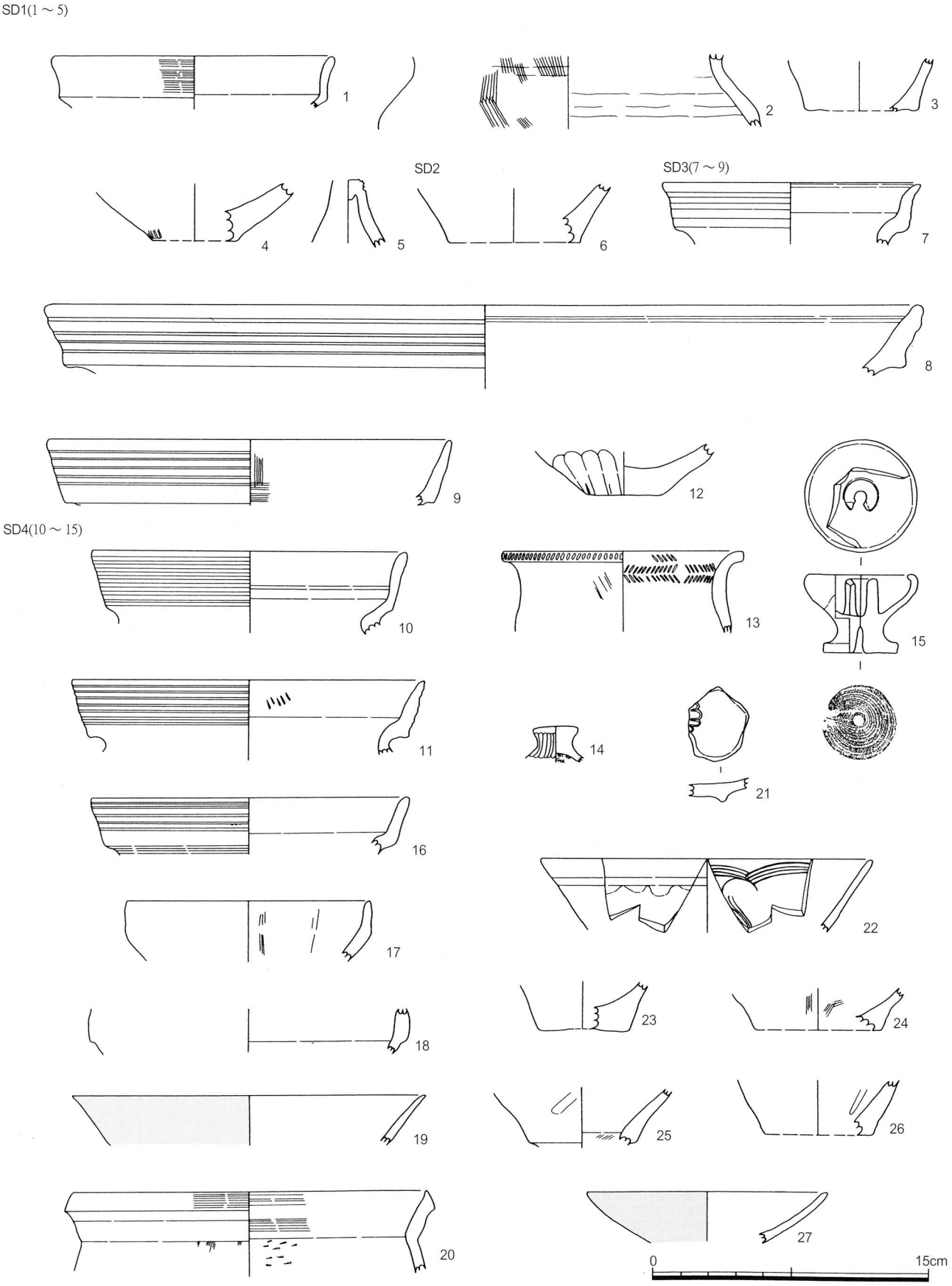
ＳＰ３
①黒色(2/1)ピート質
②にぶい黄色(6/3)粘質シルト
③暗灰黄色(4/2)粘質シルト
④暗灰黄色(5/2)粘質シルト
⑤黄灰色(5/1)粘質シルト

ＳＤ２
①黒色(2/1)粘質シルト
②黒褐色(2/2)粘質シルト＋にぶい黄橙色(7/4)粘質シルト
③褐灰色(4/1)粘質シルト
④黒色(2/1)粘質シルト＋にぶい黄橙色(7/4)粘質シルト

ＳＤ３
①黒色(2/1)粘質シルト
②黒色(2/1)粘質シルト
③にぶい黄橙色(6/3)粘質シルト＋褐灰色(4/1)粘質シルト

ＳＤ４
①灰白色(8/1)粘質シルト
②にぶい黄褐色(4/3)砂質シルト
③灰黄褐色(5/2)粘質シルト
④灰黄褐色(4/2)粘質シルト＋灰白色(8/1)粘質シルト
⑤褐色(4/4)粘質シルト
⑥暗褐色(3/3)粘質シルト
⑦灰黄褐色(4/2)粘質シルト
⑧褐灰色(5/1)砂質シルト
⑨褐灰色(5/1)粘質シルト
⑩灰白色(7/1)粘質シルト
⑦黒色(2/1)粘質シルト
⑧褐灰色(4/1)粘質シルト
⑨灰黄褐色(6/2)砂質シルト
⑩灰白色(7/1)粘質シルト
⑪黒色(2/1)粘質シルト
⑫黒褐色(2/2)粘質シルト
⑬にぶい黄橙(6/3)砂質シルト
⑭黒褐色(2/2)粘質シルト
⑮暗褐色(3/3)粘質シルト
⑯黒褐色(3/2)粘質シルト

第５図　遺構断面図(1/40)



第６図　遺物実測図(1/3)

3　遺　物（第6図）

今回の調査で出土した遺物は小破片が多く、全体の形を復元できるものはないが、弥生時代後期の土器を主体とする遺物が出土している。

ＳＤ１　１は有段口縁外面をハケ目で調整し、口縁内面が滑らかに屈曲する甕である。２は肩から頸部にかけての甕片であり、内面に輪積み痕がのこる。３・４はその形態と底径からそれぞれ壷と甕の底部とみられる。５は高杯の脚部片である。

ＳＤ２　６は底径７．２cmの壷の底部で底外面には煤状炭化物が付着する。

ＳＤ３　７・８・９はいずれも口縁に櫛状具による擬凹線を施し、７は口縁先端が細く、やや外反する甕口縁部である。８は破片が小さいため断定はできないが口径４０cmを越える大型の壷口縁であり、有段口縁部には４条の擬凹線をひく。胎土は灰白色であり、焼成は良好で固く焼きしまる。

ＳＤ４　１３は口縁部内面に櫛状具による羽状の刻み目をもち、外面端部にも刻み目を施す。丸みをおびて外反する口縁で、弥生時代中期の土器である。１０・１１・１６は有段口縁に擬凹線を施し、１１は頸部の屈曲が強くくびれる。１４は蓋のつまみで頂部内面にはハケ目があり、煤状炭化物が付着する。１５は越中瀬戸の燭で、胴部外面に鉄釉がかかり脚部は無釉である。見込みに幅７cmの燈心立てがあり、底部は糸切りである。

その他　１９・２７は外面に赤彩を施す。１９は口縁部外反が強い器台口縁である。２７は試掘調査時の出土遺物で、皿状の杯部をもち高杯の口縁とみられる。２０は口縁部が角張り、口唇部が斜め上を向く壷口縁部である。２２は同安窯系の中国青磁で１２世紀代のものとみられ、口縁内面に輪花を施し、そこから縦曲線を入れている。２１は越中瀬戸の内禿皿底部で、内面見込みに菊の印花を施す。

4　まとめ

松木遺跡は、分布調査時には今回対象地の北東部において遺物が多く採集されており、中心はそのあたりと推定される。今回は遺跡の縁辺部の小規模な調査であり、かつ削平もうけていたため遺跡の性格は明らかにできなかった。しかし分布調査の成果もあわせ、弥生時代後期後半を主体とする集落遺跡であることが推定される。今回、弥生時代中期の遺物は１点のみの出土であるが、周辺の中曽根遺跡では弥生時代中期の遺構・遺物も確認されており、今回の調査地を含む松木遺跡も弥生時代中期までさかのぼる可能性がある。

本編の後半に取り上げた松木中鹿遺跡は、弥生時代後期後半法仏Ⅱ式～古墳時代初め古府クルビまでを主体とし、松木遺跡よりもやや時代が下るとみられる。地形は松木中鹿遺跡のほうが松木遺跡より約１m高い微高地上に形成されており、なんらかの環境の変化により生活空間が変化した可能性も考えられる。

参考文献

高岡市教育委員会　1996　『市内遺跡調査概報Ⅳ』
高岡市教育委員会　1995　『高岡市埋蔵文化財分布調査概報Ⅵ』
小杉町教育委員会　1994　『小杉町針原東遺跡発掘調査報告』
大島町教育委員会　1991　『大島町荒畑遺跡発掘調査概要』

Ⅲ　周辺の遺跡について

ここでは、平成８年度に新湊市教育委員会が実施した試掘調査のうち、本書に収録した松木遺跡の周辺に位置し、ほぼ同時代の遺跡と考えられる松木中鹿（まつのきなかじか）遺跡の試掘調査結果概要について紹介する。

１　遺跡の概観（第７図）

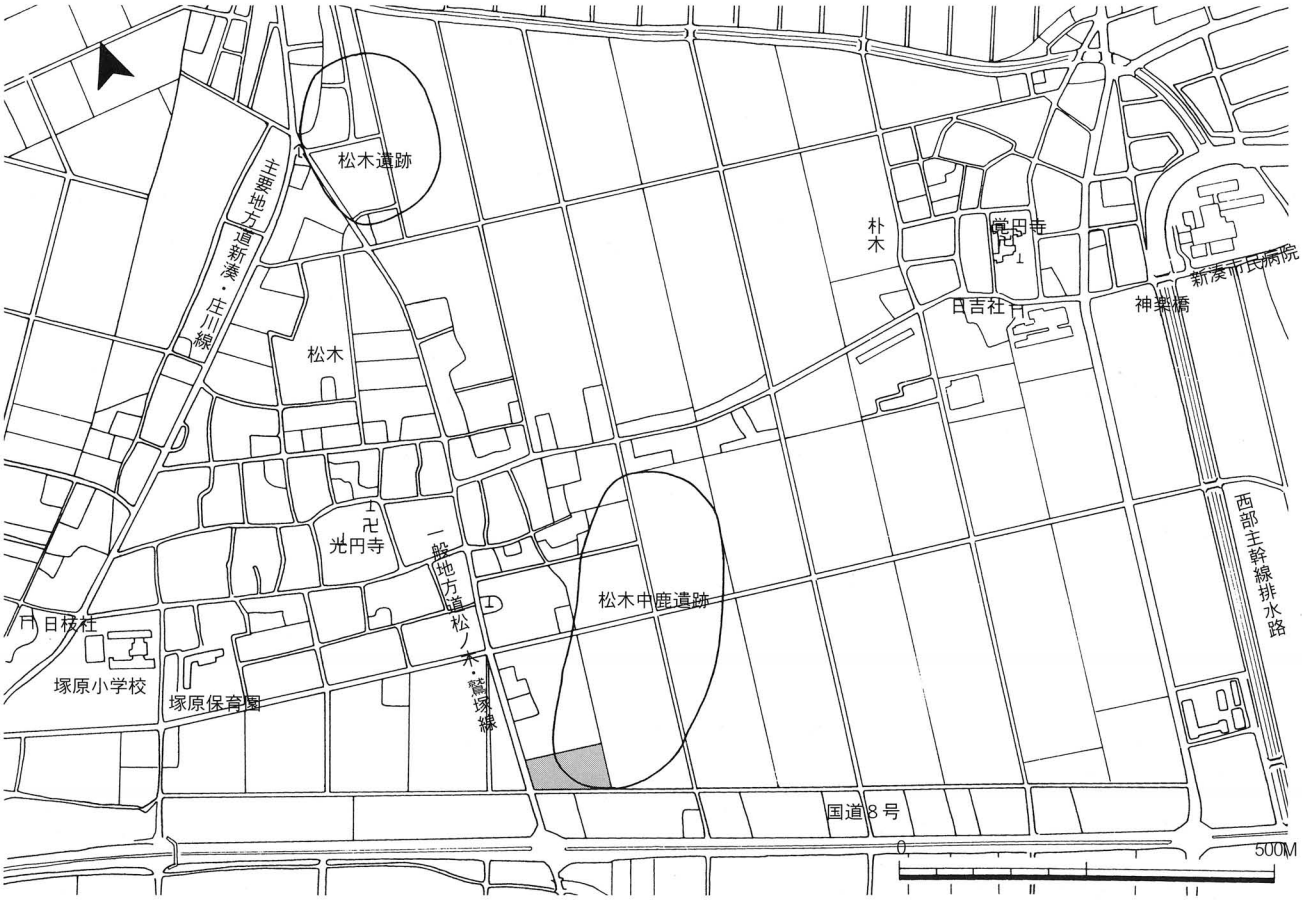
松木中鹿遺跡は、松木遺跡の約1㎞南に位置する弥生時代の遺跡である。標高は約２．７ｍであり、周辺と比較すると比較的高い微高地上に立地する。松木遺跡と同様、一般地方道松木・鷲塚線沿いの遺跡である。

昭和４６年、新湊市立新湊南部中学校郷土クラブが分布調査を行なった結果報告によると、当地を含む一帯で弥生中期の土器数十点や石器、その他珠洲焼数点などが採集されたと記録されている[(1)]。詳細な分布状況を示す記録や、出土遺物についてはほとんど残っていないが、弥生土器が散布する場所として知られていたことがわかる。

以下は、今回松木中鹿遺跡において試掘調査を実施するに至った経緯である。

平成８年３月、松木地内において民間の資材置場兼駐車場造成計画に先立ち問い合わせがあり、また平成８年４月には農振除外の申請が提出された。申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である松木中鹿遺跡の隣接地であるため、新湊市教育委員会は平成８年３月４日・４月１９日両日周辺の分布調査を実施した。その結果、申請地においても遺物の分布が認められ、地形や過去の調査結果などともあわせて、松木中鹿遺跡の範囲が従来周知されていた範囲より更に南西に広がると判断した。そのため開発を行なう際には事前に確認調査が必要である旨を申請者に通知した。

これを受けて申請者との協議の結果、耕作後の秋、工事の事前に試掘調査を実施することとなった。調査期日は平成８年９月１９日、調査対象面積は４，４８４㎡である。



第７図　周辺の遺跡について(1) (1/10,000)

2　遺跡の概要（第８図）

(1)　調査の方法

調査はバックホウにより幅約１．２ｍのトレンチ（試掘穴）を７か所に任意に設け、遺構および遺物の有無を確認した。発掘面積は１５１．０㎡である。

(2)　基本層序

基本層序は松木遺跡とほぼ同じ堆積から成る。Ⅰ層：耕作土、Ⅱ層：黒褐色粘質土、Ⅲ層：黄褐色粘質土、Ⅳ層：青灰色粘土、Ⅴ層：黒色粘土、Ⅵ層：青灰色砂と堆積する。Ⅱ層は遺物包含層である。遺構はⅡ層直下からⅢ層の地山に掘り込まれる。Ⅴ層の黒褐色粘質土は植物遺体が混じるが、粘性が強い。

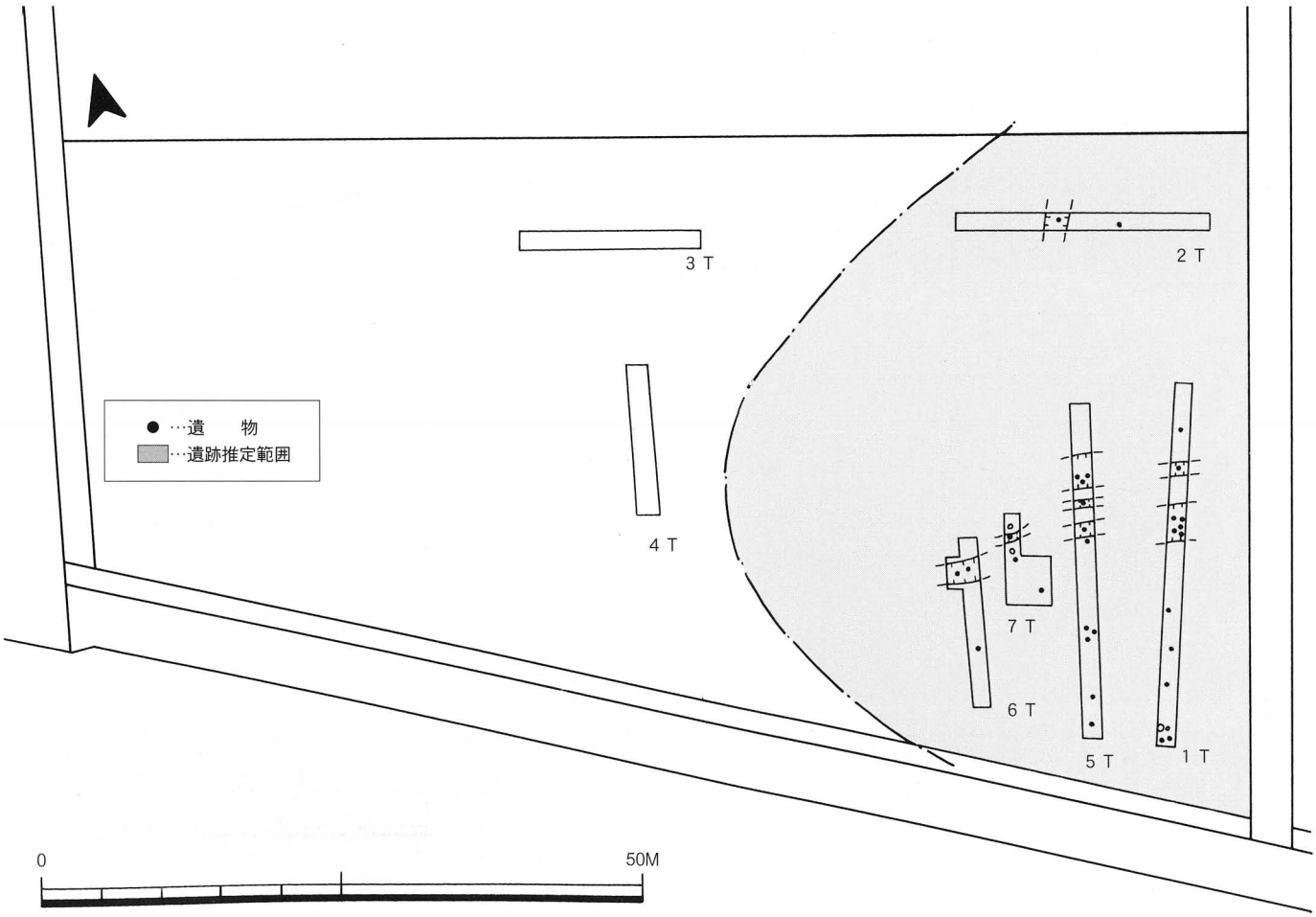
(3)　遺　構

遺構は調査区東側のトレンチにおいて溝が数本、小穴数基が確認された。

東西に走る溝が中心で、それらは１・５・６・７トレンチにおいて検出された。幅約３ｍの比較的幅の広い溝と、幅約１．０ｍのやや細い溝がある。深さは両者とも約３０㎝である。７トレンチの溝は、幅約４０㎝、深さ約１６㎝のものが一本検出された。

小穴は１・７トレンチにおいて検出され、１トレンチでは径２０㎝、深さ８㎝のものと径１５㎝、深さ７㎝の小穴が並んで検出された。７トレンチでは径３０㎝、深さ１９㎝の小穴二基がそれぞれ溝の左右に並ぶ。

西側にかけて地形は次第に低くなり、遺構・遺物とともに存在しなくなる。



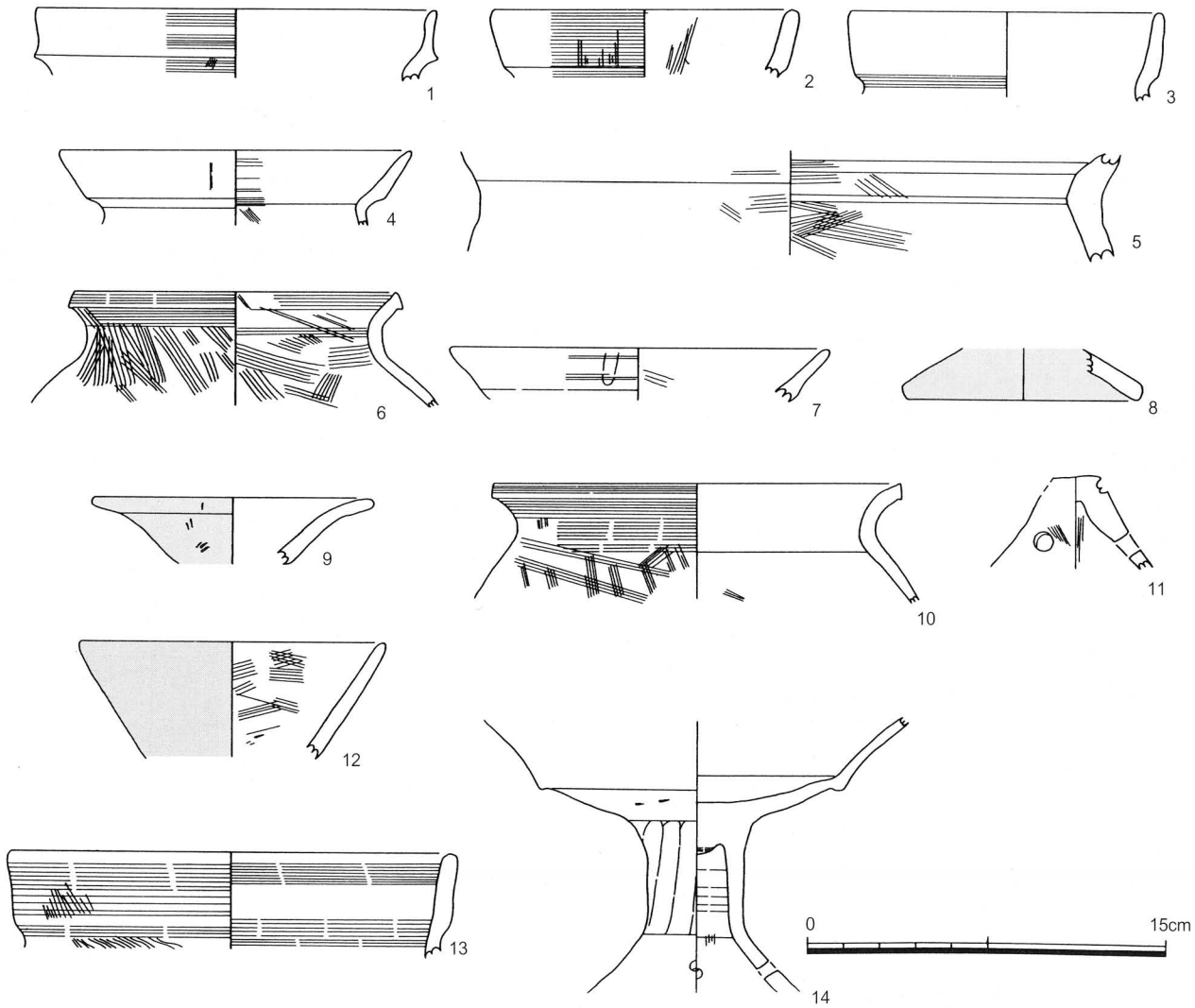
第８図　周辺の遺跡について(2) (1/600)

⑷ 遺　物（第９図）

遺物は弥生時代後期後半から古墳時代初めとみられる土器が、比較的良好な状態で１・２・５・６・７トレンチの遺構内やその周辺から出土した。

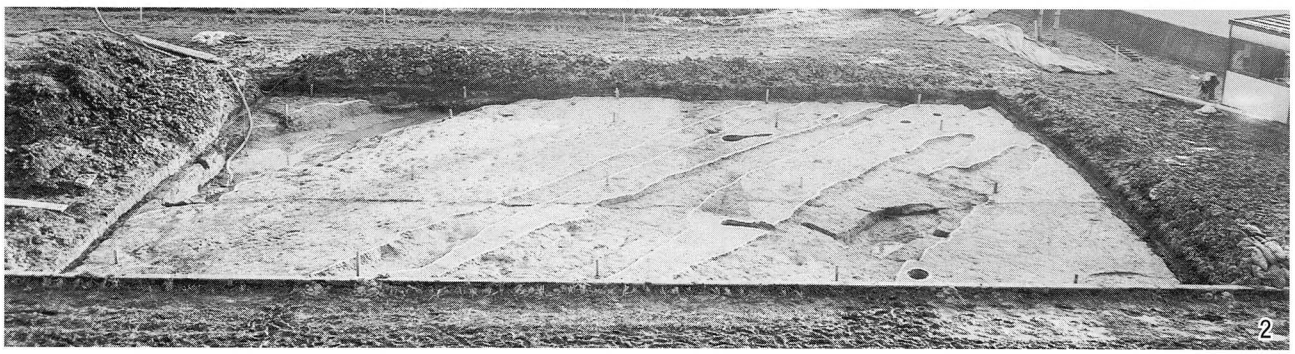
１は短めの有段口縁をもち擬凹線を施す甕片で、口縁有段部の稜を細く外方に張り出させている。外面には煤状炭化物が付着する。２は緩やかに外傾する有段口縁に擬凹線を施す甕片である。３・１３も同様で、いずれも口縁端部を丸くおさめている。４も有段口縁をもつが、口縁端部は先細る。５は甕の頸部とみられ外面に煤状炭化物が付着する。６・１０は「く」の字状に外反する甕口縁部である。６は内外面にハケ目がのこり、１０の口唇部には煤状炭化物が付着する。８は蓋とみられ、内外面に赤彩が施される。外面に赤彩を施すものには他に９・１２があり、９は高杯形土器とみられる。１２は口頸部が長く伸びる壷片である。１１は小破片であるが脚部が「ハ」の字状に開く高杯で、脚部３か所に穴がある。１４は高杯で、杯部が中位で屈曲し、口縁部は外反する。脚部は円筒状の脚柱で穴は４か所ある。

註(1) 昭和４６年 新湊市立新湊南部中学校郷土クラブ
『古代遺跡中露出遺物拾得物内訳明細書　新湊市立新湊南部中学校校下地内』

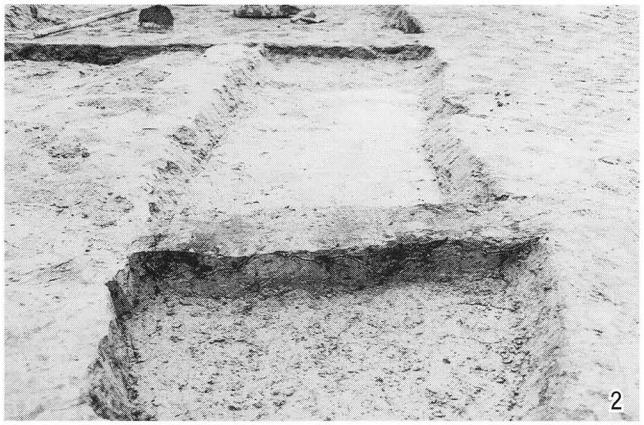


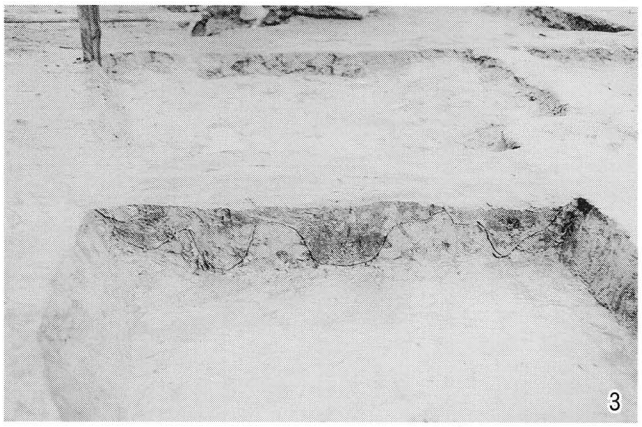
第９図　松木中鹿遺跡遺物実測図(1/3)

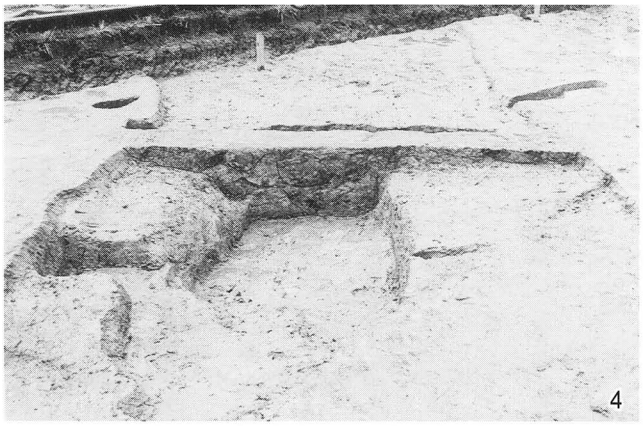
図版１　１．松木遺跡周辺航空写真　２．昭和２２年航空写真

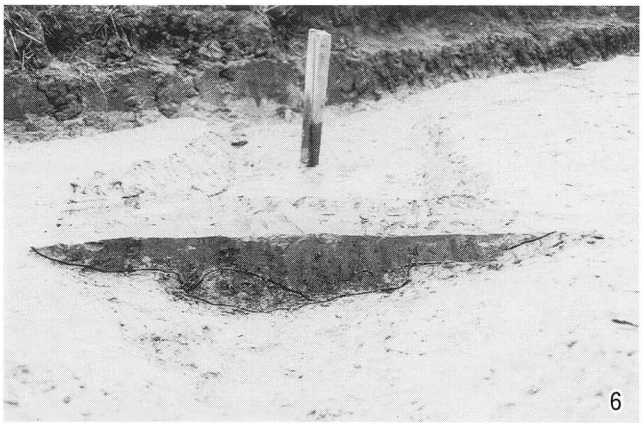


図版２　１．調査区全景（西から）　２．調査区全景(東から)　３．調査区遠景(北東から)

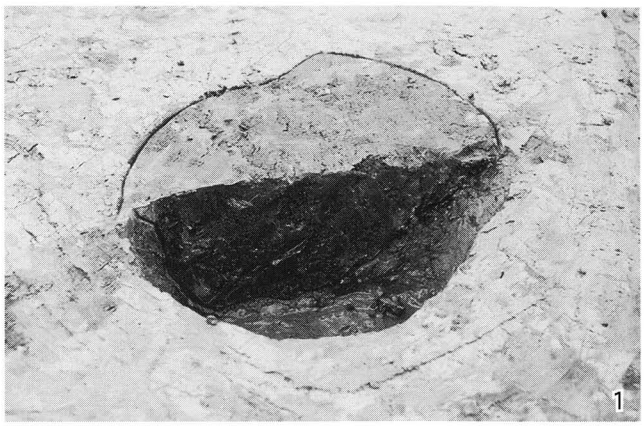


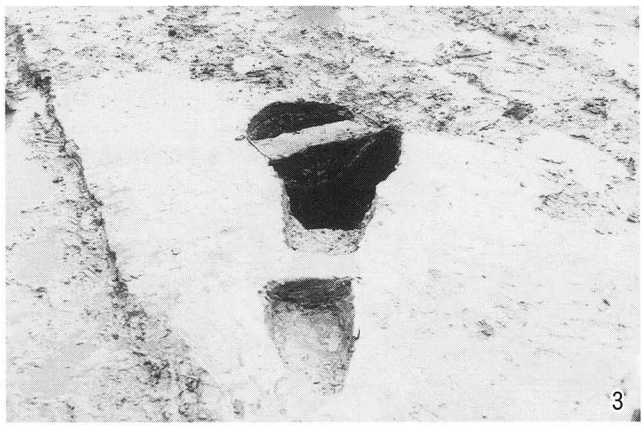


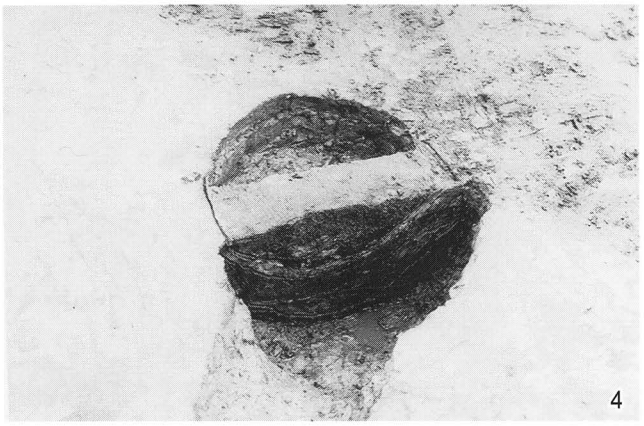




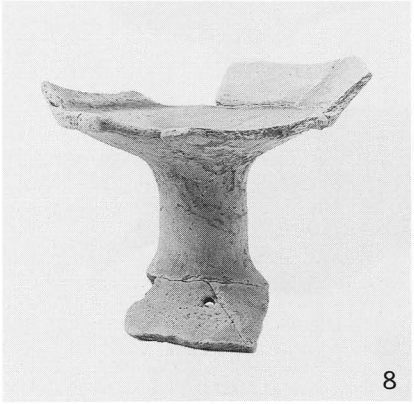
図版３　１．表土剥ぎ　２．ＳＤ１ A-A'ｾｸｼｮﾝ　３．ＳＤ１ B-B'ｾｸｼｮﾝ　４．ＳＤ１ C-C'ｾｸｼｮﾝ　５．ＳＤ２ E-E'ｾｸｼｮﾝ
６．ＳＤ３ G-G'ｾｸｼｮﾝ　７．ＳＤ４ I-I'ｾｸｼｮﾝ　８．ＳＤ４ H-H'・I-I'ｾｸｼｮﾝ　＊すべて南から

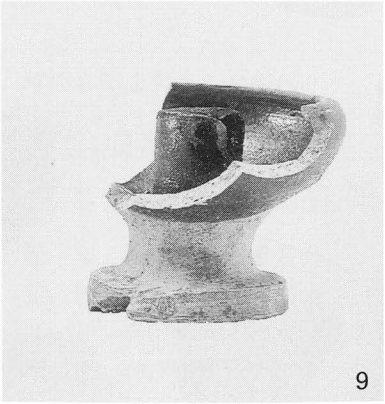


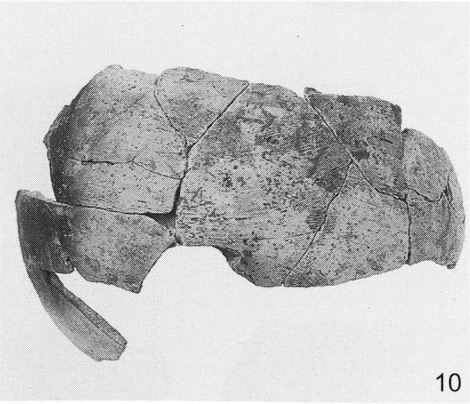




図版４　１．ＳＰ１　２．ＳＰ２　３．~４．ＳＰ３　５．遺物出土状況　６．~７．作業風景



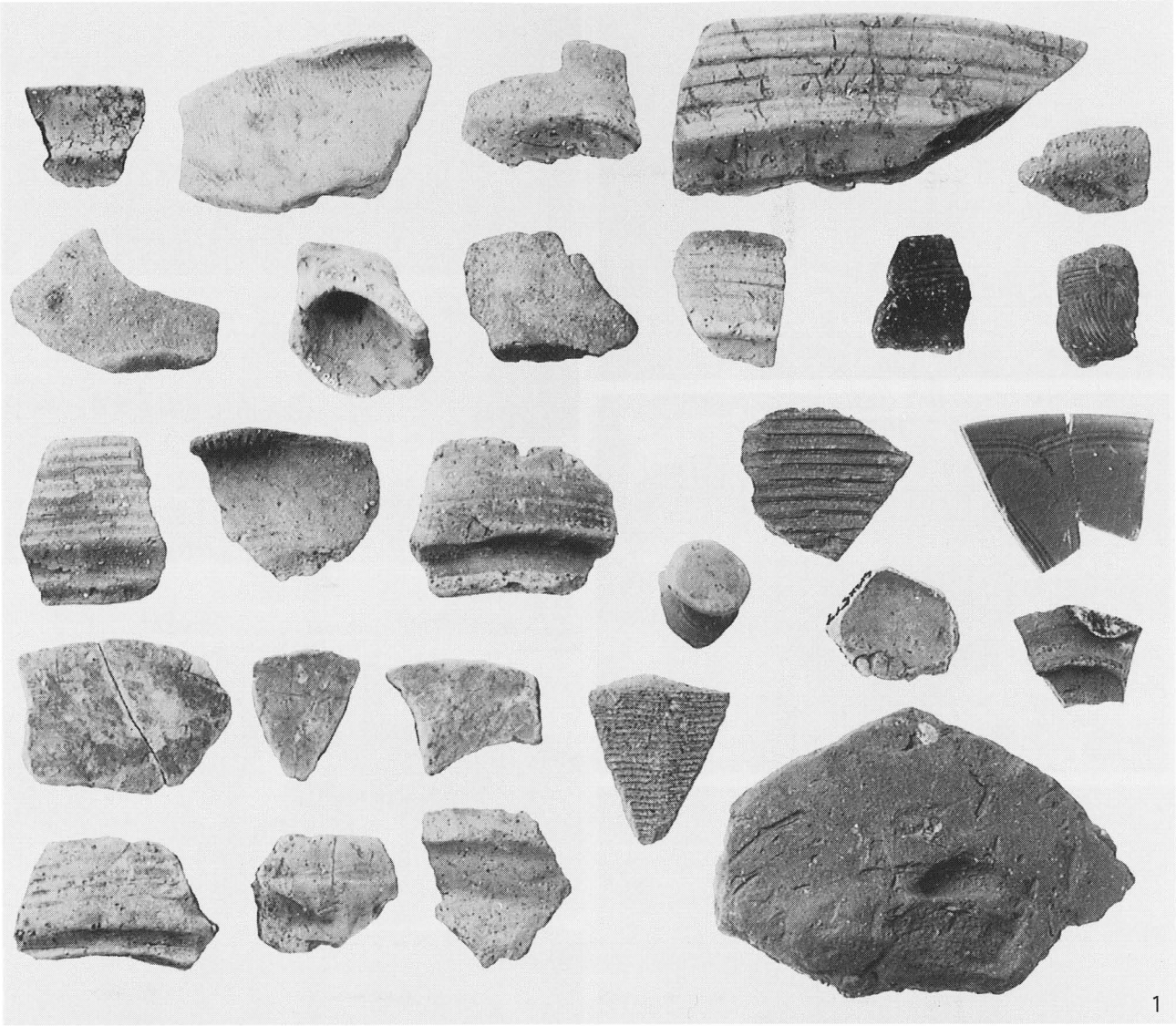


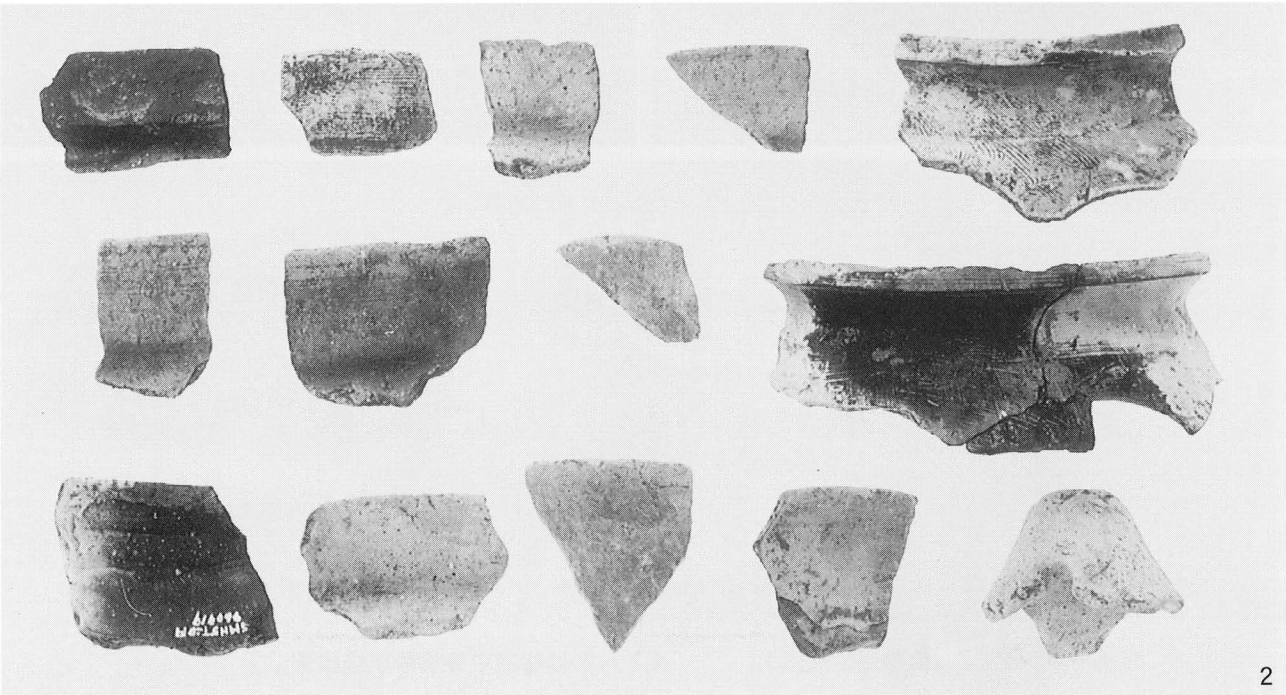


図版５　１．作業風景　２．基本土層　３.～４．遺構検出状況　５．５トレンチ断面

６．試掘トレンチ　７．遺物出土状況　　＊１～７は松木中鹿遺跡試掘調査

８．松木遺跡出土遺物　９．～10. 松木中鹿遺跡出土遺物





図版６　１．松木遺跡出土遺物　２．松木中鹿遺跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	とやまけん　しんみなとし　まつのきいせき　はっくつちょうさほうこく
書名	富山県　新湊市　松木遺跡　発掘調査報告
編著者名	宗　融子　越前慶祐
編集機関	新湊市教育委員会
所在地	〒934　富山県新湊市本町二丁目１０番３０号　TEL 0766-82-8312
発行機関	新湊市教育委員会
所在地	〒934　富山県新湊市本町二丁目１０番３０号　TEL 0766-82-8312
発行年月日	西暦１９９７年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まつのき 松木遺跡	とやまけん 富山県 しんみなとしまつのき 新湊市松木	016203	019	36°45′39″	137°45′22″	961020~ 961122	２１５	個人住宅建築に係る事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺物	主な遺構	特記事項
松木遺跡	散布地	弥生時代	弥生土器、珠洲焼 近世陶磁器	溝、小穴	

平成９年３月３１日発行

富山県新湊市
松木遺跡発掘調査報告

編　集　新湊市教育委員会
発　行　新湊市教育委員会
　　富山県新湊市本町二丁目10番30号
印　刷　谷口印刷